



第14話 心理士、保育現場にお邪魔します～保育士さんとのコンサルテーションを通して②～

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しみながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

みなさん、お元気ですか？ほんとに時間が経つのは早いものです。いや1年のサイクルが早すぎる。歳をとるとなぜ時間が足早に過ぎ去ってしまうのか？それは、その日その日の出来事が、子どもの頃には、新鮮で驚きをもって、迎えられていたのに、大人になるといふか、歳をとればとるほど、いつものルーティンとしてしか受け取れないからだとチャットさんの解答の一つとしてできます。たしかに、人生における感動の総数には限りがあるのかしらなどと少し寂しくなります。一方、お盆、クリスマス、正月や、日々の祭事がいとまなく次々とやってくることは、慌ただしくも寂しくはさせない、先人の知恵の一つではと考えたりもします。そして、今年も祇園祭のお囃子の音が聴こえる季節となりました…なんて書くと、ああ、宮井さんは京の町の方なんだなんて勘違いされるわけです。勘違いといふか完全な虚偽なんですけど。京都は京都でも京都府の南部に居住していますので、京都洛中のあの「コン、チキ、チン」といった鉦(か

ね)、太鼓、笛の雅な音色はどんだけ耳が良かろうと聴こえるはずはありません。それでも、7月の声を聞くと、空耳的に聴こえてくるような気になるのは、京都(府)民のなせる技かと（大分出身で戸籍もまだ置いたままなので、京都民を語るのも騙りなのですが）。でも、対人援助学マガジンの次号が出るのはたぶん9月あたりですから、また、別の行事に心が拠っているのでしょう。

1.コンサルテーション現場での対応のバリエーションのいろいろ

ちょっとややこしい言い回しのサブタイトルでごめんなさい。前号から引き続きのテーマで書いています。今回は、具体的によく上がってくる保育士さんからの困りごとについて書こうと思います。前回書きましたが、困りごとのテーマとしては、

- ①対象となる子どもの発達特性に絡むこと
- ②不適切な養育に関すること

だいたい、この二つに集約されるような気

がします。まず、①について、具体的によく出てくるような困りごとの場面です。

困り事①「聞いているのか、聞いていないのか？わかっているのか、わかっていないのか？それが、わからなくて不安です。」

「集団の中にいるA君に声かけしてもわかっていないのに、個別に声をかけると理解できている。しかし、個別対応ばかりはできないので困っている。」

文脈は、その子や、保育士さんの理解度によって違って来るわけですが、集団と個別の中で揺れる保育士さんのジレンマが伝わってきます。一昔前なら集中力の無さという個別性や、性格に起因しているという考えが多かったのでしょうか。今は、「特性」という言葉が保育士さんの中にも馴染んできているようです。集団の中にいるA君にいくら注意喚起しても、その状況ではなかなか難しいことはわかっている。じゃあ、どうしたらいいとなります。おかしいもので、難しいとわかっているのに「保育園は集団の中で成長するためにある」と基本に忠実な方ほど、集団でのA君への注意を繰り返してしまい、こじらせてしまうような事もあります。もちろん個々の子どもによる理解のレベルの違いも大きいですし、一律の対応などありません。個別場面で理解が良すぎるのも玉に傷で、「わざとやってんじゃないの！」とイラっとさせられるのも人情だと思います。よく使うのは「(A君は)悪気はないんですね」という言い回しです。「特性」の為せる業という分けです。これはこじ

つければ、心理療法で言う「外在化」の手法でしょう。あわせて「憎めないところもあったりして？」などとフォローを打つと「確かに！」なんて乗ってきてくれるなら、うまい流れができてきていると感じます。こうした保育士さんの側の見方(認知)が変わったからといってA君の集団での行動が急に変わるわけではありません。「特性」が急に変わるほうがおかしいわけです。保育士さんが「まあ、いいか」と思い、個別対応をコツコツ続けてくれることで、A君と保育士さんの関係性は確実に変化すると思います。でも、また時間が経てば保育士さんのイライラは募るので、定期的なコンサルテーションが必要になるのでしょう。

こうした集団 VS 個別の対立が家庭との協力にも波及した場合に、保育士さんの困惑感がさらに高まるようです。「お母さんは子どもさんの発達特性をわかっておられない」「家庭からの協力が得られない」といった嘆きに現れます。これにも外在化がうまくはたらく場合があります。つまり、お母さんも「悪気はない」という言い回しです。家庭は個別の場ですから、A君が理解しやすい状況であり、集団の中のA君の難しさはお母さんには伝わりにくくて当然というものです。そこで説明を尽くそうとしても、お母さんからすると、家ではそこそこ、非常にかわかりませんが、よく物事がわかっているA君に対しての保育園からの『誹謗中傷』に聞こえているかもというメタファーは案外効きます。

困り事①「ちょっと、自分のやりたいことを邪魔されると、すぐに相手の子を噛んでしまうので目が離せませ

ん。」

「他の子のおもちゃが気になるようですぐに取り上げるんです。でもすぐに飽きてしまい、また、他の子のおもちゃに手を出すの繰り返しです。」

「お絵描きとか、お昼ごはんとか、席についてほしい時には必ずどこかへ行ってしまいます。」

「すぐ噛む」「すぐとる」「すぐ逃げる」の3すぐに関すること。勝手に「3すぐ」なんて命名しましたが、これが結構困りごとの定番でもあります。

この困り事について一緒に考えるときは「年齢」「頻度」「期間」「程度」は必ず押さえる必要があるのは当然です。つまり、発達の視点です。同じ「噛む」という行為でも1歳児と5歳児の場合は見立てに大きな違いがあります。実際、どの子にも自我の芽生えと成長の過程で、大なり小なり起こる発達のエピソードなわけで、通常は「問題」となる前になんとか見られなくなることで収まっていきます。「噛む」ことで考えるなら「2歳児あたりの子が、玩具の取り合いで相手を噛んで泣かせちゃった。」これだけでは問題として上がってくることはないでしょう。しかし、その後、頻回となる。保育士さんが、介入して、その子と話をすると「悪いこと」だとはなんとなく理解できているし、その場では保育士さんと一緒に相手の子にも謝れる。でも、またすぐにやってしまう。これは問題なのと聞かれたら「致し方ない(問題ではない)」と答えるでしょう。「噛んでごめんね」と謝れたとしても、2歳児さんでは、他者の立場に立って考えるなんて

いうのはまず無理ですから、保育士さんの言葉をリフレインしているだけでしょう。むしろこの繰り返しが大事なわけで、「噛んだら叱られるし、取り合った末に玩具も取り上げられる。もっといい方法はないもんかな？」なんて2歳が考えはしないでしょうが、「この前、噛まずに口で言うたら、えらい褒められたわ！口で言う方が早いわ」とこれも言わないでしようが。しかし、「噛む」という直接的で強力な行為が、それよりも建設的で賞賛される言語による伝達によって代わるのが発達でしょう。保育士さんへ伝える事とすれば、周りは「噛むこと」を全力で阻止しながら、「言葉」の方がマシとわかってくれるまで気長に待つしかないなんて話を劳いながらするしかない。

一方、5歳になっても、噛んでしまうとなると、話は変わってきます。まずその子の理解力が気になります。知的な遅れがある場合は、言語的な解決に制限があるわけですから「噛んで」主張するという行為が残ってしまうのは当然です。知的な遅れはないのに噛んでしまう。これはどうしたものか？この対処は、「すぐ逃げる」にも通じるものがあります。可能性としては、注意を引くというのが根底にあるように思います。よく言われる方法の一つが「見ない」「見てやらない」というやつ。注意を与えず、できるだけ「無視する」ことで、問題行動を強化しないという行動療法的な対処です。基本的にはその通りだと思います。しかしながら、実験室ではありません。事は現場で起こっているのです。止めないわけにはいきません。しかしながらその噛む子とのやり取りが「噛む場面を止めることばかり」になっていることに、賢い保育士さんならすぐに気

づいてくれます。保育士さんの意識の変化と、「止める→叱る」ことをできるだけ手短かに済ませる。このことだけでも事態には変化の兆しが見える場合も多いと思います。もう一つお伝えするは、「うまくいっている時」「やりそうでやらなかったとき」の対応です。噛むことで言えば、噛む一歩手前だったのに、なぜか噛まずにおられた。逃げ出すことで言えば、教室から飛び出したのに、なぜか自分で戻ってきた。なぜか、ずっと給食の席に着けた。いわゆる「例外」というやつです。よくできた保育士さんでも案外こうした普通の行動(従来とるべき行動)については、喜びこそすれ、別段声をかけなかったり、スルーしてしまったりもあります。褒めるに値するような行動ではなく、こうした従来みんながやらないといけない普通の行動こそ注目すべきだという話をお伝えします。注目するだけでなく、インパクトを残すべく、ちょっと盛り目に褒める。あるいは「A君が〇〇で、先生うれしい」とか「A君が〇〇してくれたので、助かる」とか、先生が一歩へりくだって驚いたり、喜んだりしてくれると子どもも「あら、どうなっているの」と、少しだけ非日常性を感じてくれるようです。A君と問題行動以外で交流できるチャンスを見逃す手はありません。

困り事②「児童相談所から見守りを頼まれたケースがあるけれど、どう寄り添えばいいのかわからない。」

「お母さんの子どもへのあたりがきつい。子どもも帰りたがらなかったりする。虐待かどうかどう判断したらよいか迷っている。」

全く同様の困りごとがあるというのではありませんが、上記のようなニュアンスを感じる相談は受けます。不適切な養育問題抱えているであろうご家庭へどうかかわったらよいのかという事です。まず、申し上げるのは、そう簡単に関われるものではないという事です。「困ってるって聞いているから何でも言って」なんて超ドストレートで言えるわけではありません。こんな直球で言える関係性がもともとあるなら誰も悩んだりしません。こっちは「寄り添いたい」と思っていたとしても、家族にすれば「できるだけ関わらないでほしい」というのがほんのところだったりします。普段の関わり大切さを再認識させられるわけですが。ではどうするの？その家族だけが特別というわけではない定例の懇談会なんていうのは、もってこいですよね。でも何を話すのか？下手をすると、その子の普段の様子を伝えるだけで終わってしまう。かといって先ほどの星飛雄馬(たとえば昭和ですね)タイプで迫っても「なんもないです」と逃げられる公算大ですよ。ズバリ、養育のことでしょう！」ちびまる子ちゃんの塙君みたく迫ってもちっともうけないでしょう。

「A君やお家のことで、今、お母さんが困っていることを教えてもらえると助かります。」この辺りでいかがでしょう。そして、それが園側が思っている困り事と一致しない場合でも、その通り受け止めることが最も大事だと思います。園側は、子育てについての問題でしようが、「旦那が働かない」「姑とうまくいっていない」「引っ越したい」「体調がいまいち」など、困り事が園側とどんなに食い違っているても、「そうですか。それはお困りでしょう」で始めることだと思いま

す。お母さんの困りごとを聴いてから、後半か最後に園が思う困り事というか心配事（不適切な養育に関すること）を述べる順番が大事だという事です。これでお母さんと繋がれるかどうかはわかりませんが、星飛雄馬よりもストライクが取れる確率は上がるでしょう。

次の虐待かどうか心配だけど、わからないので見守っているところというニュアンスですが、けっこう多い。この場合、保育園は、虐待かどうかを判断する場所ではないことを共有します。園として、家族との関係を壊したくない、心配なことはあるがよくやっている家族でもある、判断するには情報が少ないしもっと集めてからなどと、理由はいろいろあるでしょう。しかし、「虐待かどうかわからないけど心配というリスク」があるわけです。わからないから心配というのは、りっぱな根拠です。もちろん、ただ何となく虐待を疑っているでは困りますから、その上で具体的な情報を整理することだと思います。わからないから、はっきりするまで情報を温めておく必要はないという話をします。特に保育園や保育士さんが責任を強く感じている場合など、「(保育園は)虐待かどうか判断する場所」ではないという前述の話をします。

さて、この「人生は対応のバリエーション」を今回でしばらくお休みさせていただこうと思います。お休みの理由は、執筆者@短信に書いています。

また、お会いできる日を楽しみに！！